

全国に響け、「介護維新」の声！（下）

NPO福祉用具ネット 副理事長 坂田 栄二

「抱え上げない看護・介護を、あたりまえのケアに！」

NPO福祉用具ネットでは、これをスローガンに掲げ、地域に根付かせ拡大しようと頑張っている。

では、どうやればスローガンに取り組むのか？

下元先生の提案は、まず「核になる人の育成」であった。それは、平成30年の年明け早々の1月6日（土）から8日（月）に高知県で開催される「なちゅは」合宿研修にNPO福祉用具ネットの中から選抜した「核になる人」の参加のお誘いであった。本来は、「なちゅは」の北海道から沖縄までのメンバー中から選抜された52人の強化合宿であるが、その中にNPO福祉用具ネット枠を特別に設けていただくということだった。

NPO福祉用具ネットには、3人の枠を与えていただいた。

事務局からの急な呼びかけにも関わらず、3人は参加権利を得た。どれほど過酷な研修かも理解せずに、NPOからの急な呼びかけに応じて参加したが、彼らは、新しい介護思想と技術を九州に持ち帰ってきた勇士と言える。

その研修の詳細は、本NPO発行の「ささえ63号」に寄稿して頂いており、読めば使命を受けて参加した彼らの真剣さが伝わってくる。そして、今後自分が何をしなければいけないかといった目的もしっかり見据え、自信と抱負を持っていることを窺い知ることが出来る。この、彼らの自信と抱負は、今では、NPOの大きな資産となっている。

技能認定の洗礼

では、彼らが洗礼を受けたチェック（技能認定）とはどんなものだろうか。

具体的には、「抱え上げない」ためのツール（リフト、スライディングボード・・・など）を、被介護者モデルを対象に実際に使いこなし、その際に使う目的や使い方をプレゼンする技術を、チェックリストに基づいてチェックマンに評価してもらい、規定をクリアすると認定OKとなる。

ここで重要なことは、認定を受ける人は、チェックリストに記載されている「どのような手順でツールを使い、その各過程毎で何を説明しなければならないか」をどうやってマスターしたかである。

彼らは、NPOの通常の研修では、リーダーとして研修生を指導する立場にある。

通常研修では、研修生の判らないところや修正すべきところを見つけて、部分指導をすることが多い。

しかし今回のチェックでは、被介護者と向き合い、

介護の最初から終わりまでを一貫して行うため、彼らは手順を間違わないように頭の中をもう一度整理しておかなければならない。

またチェックマンにとっては、他のチェックマンとの評価に差があってはならないので、チェック基準書が必要になる。

チェック基準書の制定

この基準書を編み出したのが「なちゅは」の下元先生であり、統一テキストとして制定されている。

テキストを作ることは極めて大変なことである。限られたページの中で、必要なことを、解かり易く記載するのがテキストである。

チェック用テキストの場合、まず第一に何をチェック項目とするか、その項目の重要度・優先度はどれだけかなどを決め、基本構成を考えることになるのだろう。

次いで、より理解しやすくするには、イラスト・写真が重宝される。しかし、どの方向から、どれくらいの大きさ（画角・サイズ）で、写真を撮れば理解しやすいのかを考える必要がある。その上、その写真にコメントをつけなければ、読み手はどこに注目すればいいのか解からない。また、このコメントが面倒である。例えば「足を挙げて・・・」との記載があれば、読み手は、右足か左足か両足か迷う。このためには、写真とコメントとを連携させるよう記載に配慮しなければならない。

連続所作を写真・文字で表現する難しさ

もっと難しいことは、介護動作は一連の流れとして行われるが、この流れを文字化する点にある。また、不連続に写真化して並べても、実は分断された写真間にも重要な所作が隠れている点にある。

このような難しさは、例えば日本舞踊のような踊りやダンス、接遇の所作にも言える。日本舞踊では、師匠の前で、あるいは横に並んでその都度指摘を受けながら練習を繰り返すことで上達する。DVDやCDでも理解できそうに思うが、現実にはうまくいかない。

おそらく下元先生は、自分の介護動作を思い浮かべながら、何を優先させ、どんな写真を撮り、どんなコメントをつければよいのか、何を評価すれば良いのかなどを考えながら、忙しい時間の中でまとめ上げたに違いない。

この統一チェック用テキストが、惜しげもなく高知から発信され、腰痛に悩む日本中を変えることになるのだろう。そしてこれこそが、「介護維新」であろう。全国の有志は、立ち上がってほしい。

「抱え上げない介護技術を伝えられる人になるための技術認定チェック」

合格者の声

実施日：2018年9月16日（日）～17日（月）

認定チェック項目：10項目（詳細はささえ65号に掲載）

挑戦者：33人 合格者：20人

合格者の皆さんに次の①～③について回答をしていただきました。

- ① 技術認定チェック対策として、特に頑張ったこと。
- ② 試験合格後に何か変化がありましたか（自分自身や廻りの変化など）。
- ③ 今、現在の活動状況を具体的に教えて下さい。



施設内での伝える仲間が育ってきています。リフトの購入までは時間がかかりそうなので、デモ機を借りたりして、現場への意識の浸透を図ることを試んでいます。購入についても上層部に働きかけていきたいと思っています。SAGAあたりまえケアネットワークの一員としては、依頼のあった研修会で伝える活動や、新規メンバーも増えたので、メンバー内での勉強会をおこなっています。

✿岩本幸子（理学療法士）✿

- ① 動画を見たり、チェック表にそって繰り返し確認したりして、自分だけで時間を見つけておこなっていましたが、やはり田川での学習会に参加したり、佐賀のチームで集まってお互いの動作を確認し、指摘してもらったことがとても役に立ちました。どこに行くにも移動は少し遠くて大変ではありましたが、その分の価値はあったと思っています。
- ② 試験に合格したと言っても、どうか項目をこなすだけで、スムーズにわかりやすく伝えるにはまだまだだと思いますが、一応できていると認めて頂いたことで、いろんな場面で伝える際に、自分の（間違っていないという）自信になっています。認定を受ける前にも研修会のタスク等で伝える機会がありましたが、本当に正しいことを言っているのかの不安がありましたので。
- ③ 所属している施設では、短時間の伝達の間を設けたり、利用者に合わせてその都度伝えたりしています。全職員対象の施設内研修会を1度行いました。シートやボードを少しずつ増やし、



✿染矢利章（理学療法士）✿

- ① 身体が硬いので、身体の動かし方、腰を落としでの動き。
- ② 利用者さんへの身体の接触（ソフトタッチ）の仕方。説明時の言葉選びや理解していただけるよう分かりやすい言葉使いを心がけるようになった。具体的な改善までには至っていないが、自分や他者の不良姿勢に注意がいくようになった。
- ③ 技術認定チェック勉強会にタスクとして参加している。技術認定チェック受講者への個別勉強会の実施。

✧石塚和代（介護福祉士）✧

- ① 実技研修会の追加開催時、少しでも参加できるように仕事を調整し参加した。同僚にモデルになってもらい、夜遅くまで練習を行った。
- ② 合格が出発点と思い、より深く学ばなければと思った。職場では少数の方ではあるが、介助時の姿勢を正そうと努力してくれているし、介助時に一緒にケアに入り伝えるよう心掛けている。
- ③ ノーリフトケアを実施していない施設のため、技術認定伝達に携わっている。友人に伝達したいので時間を調節し、技術向上の訓練を行っていく予定である。

✧緒方博行（理学療法士）✧

- ① 自分なりに介助方法に関する理解を深め、介助時の身体の使い方を意識しました。
- ② 認定取得という肩書きもあるのか質問等を受ける事が増えました。また、自分への自信にも繋がりもっと頑張らないとという気持ちになりました。
- ③ 熊本での認定取得2期生育成やチェッカー練習が始まりました。熊本で実施している研修会でのタスクを担当しています。熊本では一項目ずつ各週に分け、2期生指導、2期生による介助指導やチェッカー練習として対応しています。



✧木村教子（作業療法士）✧

- ① 臨床ではリフトを使わないので、自主学習会で頑張っ練習した。抱え上げない介護の概念を動作と共に理解しながら覚えた。体重移動の仕方を教えて貰いながら、体に入れていった。ポジショニングやボード移乗の体の向きと体重移動についても頑張った。

- ② 抱え上げない介護を通してまずは、自分の職場で広めていかないといい、自分が関わらない利用者さんの情報もダンボの耳で聞くようにした。介助方法についても、（聞かれなくても）よいアドバイスをしなければならぬと考えようになった。座れない人の移乗方法として、リフトをどのように入れていくか模索中。
- ③ 臨床の場で抱え上げないで行える方法を家族や関わるスタッフに指導出来るように、今回身につけたものを人に分かりやすく指導出来るように日々模索中。田川で抱え上げない介護を広めるため、田川のメンバーでどのようにすれば良いか検討中。どこですか、道具がないので、太陽セランドに協力を得るためにはどうしたらよいか等々検討をすすめている。



✧中武亜希子（作業療法士）✧

- ① 自分の悪い癖や不得意な介助方法の練習や伝わりやすい説明、話し方、表現方法を頑張りました。
- ② 特に変わりはなく、手を抜かないよう行動しています。
- ③ 所属している施設職員に抱え上げない介護の指導を行っています。なちゅは福岡の活動を行っています。

✧大蔵典子（介護福祉士・相談支援専門員）✧

- ① 何度も何度も練習し、勉強会にできるだけ参加をして抱え上げない介護の動きを体で覚える努力をした。動きそのものを覚えるのではなく、なぜそうするのか、何のためにしているのかを常に考え、動くように気を付けた。人に上手く伝えるためにはどうしたらよいか、どう見せたらよいかなども必要と思いい、見せる側・伝える側の気を付ける点も習得できるように頑張った。
- ② 自分自身では、重心移動や支持面での構えなど

自分の体の動かし方が楽しく、利用者の方が負担なく動いていただけるので、嬉しいです。他の職員からは研修や出張などに行くと、当施設の名前(ひばり～ヒルズ)が出て「すごいところですね」と言われるらしく、それに恥ないような中身にしていかなければならないと思っています。

- ③ 地域では、当施設が大分県ノーリフティングケア推進事業のモデル施設でもあり、県内の他施設に抱え上げない介護を伝えに行く役割をいただき、伝達に頑張っているところです。自施設では、ノーリフティングケアチームメンバーの再編成を行い、再活動を始めたところです。



✿木村 頌 (シーティングエンジニア・福祉用具専門相談員) ✿

- ① 場数を踏むこと。人の喋り方、伝え方、意図を話している人から聞くこと。
- ② 主導して様々なことをやる必要があると感じました。人にやってもらってばかりではダメで、変えたいと思うなら、まず自分が動かなければならないと感じています。
- ③ ノーリフティングケアに関しては様々な場所で講義や啓発活動を行っており、依頼がある特養や病院においてはチームケアを意識したマネジメントに着手しています。職場内においてはノーリフティングケアを基本的なスキルとしてしっかり相手に伝えられる職員育成を目指し、所内でしっかり教えていける人材育成に努めています。

✿鎌瀬友理 (介護福祉士) ✿

- ① まずは技術を身体に染みこませること。しっかりと理解し身体の使い方、どの場面で自分が不良姿勢になってしまっているかを知る。いただいた資料の言葉を覚えるのではなく、自分らしい自分の言葉としてでてくるように意識しな

がら学んでいった。理由は、はじめて介護職に就く人に伝えるには、家族に介護指導をするなら、地域の方々に教える時には…と私自身スラ言うことはできないし「わからない」「難しい」「できない」と思っていたからこそ難しい言い回しや専門用語は使いたくないなと思っていたからだ。

- ② 合格した事で多少の自信にはなり、今までより積極的に人に教える事ができるようにはなってきた。また、学びにきた人からすれば私たちは、講師と同じような立場にみられていることを意識し気がひきしまつて勉強会に望むようになった。合格して人に教えるようになってからの方がより理解できてきた。
- ③ 毎週水曜日に勉強会を開催しており、次に認定試験を受ける人だけが学ぶ週を設けている。今回認定を受けた人がタスクとして三組ほどに分かれて指導し最後にメンバー内で発表。認定試験のチェック項目を確認しながらフィードバックを行い私達自身も『観る』力をつける練習をしている。そして次の週には Facebook などの広報により集まった方を対象にした。勉強会を開催し認定試験を受ける人がそれぞれプレゼンを行う形をとっている。また小林代表に講師依頼があったときにはメンバーの中で行ける人はサポートに入り技術プレゼンを行なっている。

✿増本康代 (作業療法士) ✿

- ① なぜ、そうしなければならないのか理解を深めること。対象者を介助するとき、タッチの方法。シートやグローブを主に職場で使っているため、必ず使用方法をマスターすること。介助側の姿勢も出来るだけ体で覚えること。
- ② 自信が少しくきました。この認定があるからこそ、伝える機会を増やしていけると思えるようになりました。
- ③ 勤務先では、寝たきりの方や移乗に介助が必要な方がおられ、シートや圧抜きを常にしており、抱えない介助方法でその方に合わせた動きを考えながら行ってます。しかし少人数の抱えない介助だけでは、対象者の拘縮などの改善に繋がらないのが現状だと思います。今後、少しずつ勉強会が増えることで抱えない介護を伝えて行きたいと思っています。

